

28. 骨シンチグラフィ上、微小骨折と鑑別が困難であった肋骨転移例の検討

大塚 信昭 森田 浩一 小野志磨人
永井 清久 友光 達志 三村 浩朗
柳元 真一 福永 仁夫 (川崎医大・核)

川崎医大附属病院核医学科において、最近の6年間に施行した約10,000例の骨シンチグラフィのうち、肋骨転移を良性の肋骨病変と見誤った5症例につき retrospective に検討を行った。骨シンチグラフィ上、5症例はいわゆる微小骨折時に認められる hot spot を呈しており、肋骨転移にみられる肋骨に沿った杆棒状の集積ではなかったため早期診断が不可能であった。このことは、骨シンチグラフィの読影時には肋骨の hot spot もごく稀に肋骨転移があることを考慮に入れ、注意深く診断をすすめるべきと考えられた。

29. 骨塩量測定装置 DCS-3000 の使用経験

——人体ファントムによる再現性の検討——

八木 大 棚田 修二 村瀬 研也
菅原 敬文 井上 武 青野 祥司
中村 誠治 木村 良子 濱本 研
(愛媛大・放)

本院に導入された DXA による多検出器型骨塩量測定装置 DCS-3000 の測定値の再現性について人体ファントムを用いて検討した。

標準モード(腰椎正面 30 秒, 側面 150 秒)による測定

で、腰椎正面では CV=0.43%, 腰椎側面で CV=0.68% と良好な再現性が得られた。また日内変動についても腰椎正面で CV=0.36% と良好であった。

DCS-3000 はファンビームと 90 個の多検出器を用い大幅に測定時間が短縮され、なおかつ高い再現性が得られる骨塩量測定装置であり、in vivo にても再現性の高い骨塩量測定が可能であると期待される。

30. 動物腫瘍におけるモノクローナル抗体の腫瘍内分布の検討

佐賀 恒夫 佐藤 則子 道家 雅子
光藤 和代 三並 珪 渡辺 祐司
(倉敷中央病院・放)

J.N. Weinstein R.D. Neumann (NIH)

モルモット肺転移モデルにおける、RI 標識モノクローナル抗体の腫瘍内分布について検討した。直径数百マイクロンの微小転移巣では、抗原の発現は比較的均一であった。RI 標識特異抗体の少量 (30 μ g) 投与後 6 時間では、抗体は転移巣の辺縁部および腫瘍内血管の周囲のみ認められ、投与 72 時間後にも抗体の組織内浸透は不十分で、分布はきわめて不均一であった。特異抗体を大量 (1 mg) 投与しても、6 時間後では、抗体は転移巣の辺縁のみに存在し、72 時間後に初めて転移巣内にびまん性に分布した。この現象は、非特異抗体の投与後には認められず、特異的な抗原抗体反応が主たる原因と考えられた。より均一な抗体の腫瘍内分布を得るためには、抗体の大量投与が必要であると考えられた。